

ウェディング・ヴェールの研究

A Study on Wedding Veils

林 綾美 平野 紗江 齋藤 良子 設水 彩加
HAYASHI, Ayami HIRANO, Sae SAITO, Ryoko SHIMIZU, Ayaka

I はじめに

ウェディング・ヴェール(図1)は、ウェディング・ドレスと共に装着するヘッドアクセサリーの一つであり、結婚式にウェディング・ドレスを着用する人が多い今日の日本では、重要なアイテムとしてブライダル雑誌等に特集されるほど注目されている。しかし、取り上げられているのは装飾的な部分ばかりであり、ヴェール本来の意味などは一般的に知られていない。また、ヴェールの制作方法に関する資料は、ウェディング・ドレスの制作方法に関する資料に比べ、格段に少ない。このため本学モードクリエーションコースの卒業制作でウェディング・ドレスを制作する学生は、それぞれのドレスに合うヴェールを独自に模索しているのが現状である。本研究では、素材やパターンなどの違いによるウェディング・ヴェールを試作し、それぞれの特徴を分析することで、制作イメージが容易になることを目的とする。



図1 ウェディング・ヴェール

II ヴェールについて

ヴェールとは、顔や頭を覆う薄い布のことで、保護や隠蔽、装飾などの役割を持ち、顔を覆うヴェールをフェイス・ヴェール、頭を覆うヴェールをバック・ヴェールという。儀礼の際に被りものをするのは、今日でも世界的に見うけられ、宗教的な意味や風習として用いられる。現在一般的に使われるヴェールの種類として、結婚式で装着するウェディング・ヴェールや喪装用のモウニング・ヴェール (mourning veil)、帽子の装飾に用いられるヴェールなどがある。

今回研究するウェディング・ヴェールとは、結婚式に花嫁が頭に装着するヴェールのことを指す。日本では、白いチュールで作られるヴェールが比較的多いが、使用される素材はチュールだけに限らず様々である。また、ヴェールの丈やデザインも多種多様にある。

ウェディング・ヴェールは、欧米では花嫁を守る魔除けのアイテムとして解釈されていることが多い。更に、ヴェールは花嫁が両親に守られていた娘時代を象徴し、花嫁がヴェールをあげるにより二人の間の垣根が除かれ、新しい人生の始まりを象徴するともいわれている¹⁾。また、花嫁に注がれてきた両親の愛情をヴェールに例え、花嫁がヴェールを捲り上げることで愛情を注ぐ役目を引き継ぐなど、様々に解釈されている。

ヴェールは結婚式のみならず、古代ローマ期では、宗教的風習から日常的に身に着ける習慣があった。当時のウェディング・ヴェールは白に限らず、オレンジ、紫、黄色のものが多かったといわれている²⁾。白いヴェールが一般的な花嫁衣裳の一つとしてヨーロッパに広がっていったのは、13~14世

紀ごろである。また、白いウェディング・ドレスと白いウェディング・ヴェールと一緒に着用されるようになったのは、1840年にヴィクトリア女王が自身の結婚式に白いウェディング・ドレスとホニトンレースのヴェールを身に着けたことが一つの要因である。1860年代には顔を隠すヴェールが登場し、花嫁のはじらいの象徴³⁾とされた。現代では、ヴェールはその時々の流行や身に着けるドレスに合わせて花嫁の好みで選ばれることが多く、装飾的に欠かせないものとして扱われている。

II-1 ヴェールの種類について

ヴェールの種類は、顔を覆うフェイス・ヴェールがあるフェイスアップ・ヴェールや、フェイス・ヴェールがないマリア・ヴェールがある。(図2、3)



図2 フェイスアップ・ヴェール

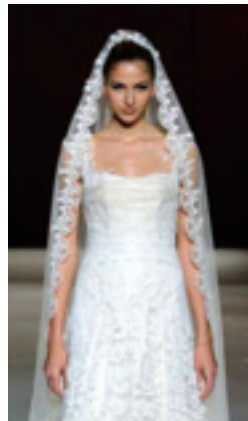


図3 マリア・ヴェール

II-2 ヴェールの素材について

現在ヴェールに用いる素材はチュールやオーガンジー、レースなどがあげられる。中でも多く見られるのがチュールである。

1) チュール

チュールとは絹、綿、合化繊の、亀甲形のメッシュを現した、ボビネットのプレネット機で作られたネット地である⁴⁾。D(デニール)という単位は、9000mの繊維に対してのg(グラム)を表し、1g=1Dとなり、15D、20D、30D、50D、70Dと続く。(図4)

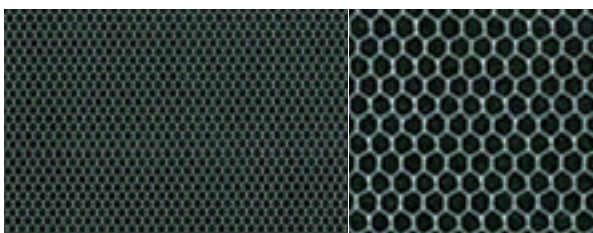


図4 チュール

部分拡大

2) オーガンジー

オーガンジーとは薄く透け、張りのある平織の生地のことである。(図5)

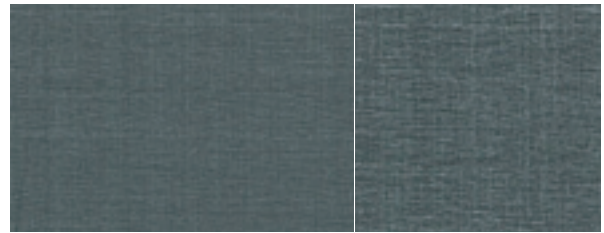


図5 オーガンジー

部分拡大

3) レース

レースとは撚りや編みなどでネットと模様を作り、模様そのものが布地になっている装飾的な生地のことである。部分的な装飾として使用することもある。(図6)

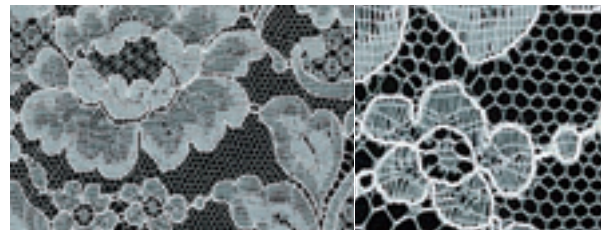


図6 レース

部分拡大

III 調査について

ヴェールを制作する際のポイントとして「素材」、「ボリューム感」、「丈の長さ」、「裾線のライン」を取り上げる。ヴェールの作り方に関して掲載がある単行本9冊、服飾造形に関する教科書1冊など、一般的に入手出来る書籍から27点の資料を参考とし、各ポイントの平均値を割り出し、比較の基準とする。取り上げるヴェールの種類として、本研究では日本の挙式でよく着装され、需要が多いフェイスアップ・ヴェールのサンプルを項目ごとに複数試作し、形状を比較することでそれぞれの特徴の分析を試みる。

III-1 ヴェールの試作条件

項目ごとに行う比較の条件を除き、以下の条件でヴェールを試作する。

1) 着装方法について

身長174cmの直立マネキンを着装者と仮定し、100cmのトレーンを引いたドレスを着用した状態で、試作したヴェールを着装し、写真撮影を行う。ヴェール

の着け位置は、ボリュームや形状が比較しやすいトップポイント（図7）と呼ばれる前方とする。



図7 トップポイント

2) 使用素材について

素材の比較以外は、15D チュール（ナイロン100%）を使用する。

3) パターンについて

バック・ヴェールの丈は90cm、フェイス・ヴェールの丈は60cmとする。ヴェールの幅は、15D チュールの幅191cmをそのまま使用し、サイドに垂れる丈は45cmとする。（図8）

四つ角は、縦と横それぞれ45cm ずつのポイントと、二等分線上で22cm を通るカーブとする。（図9）

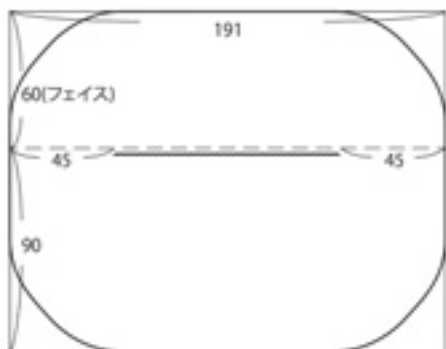


図8 試作条件のパターン

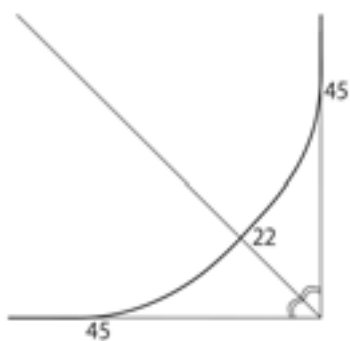


図9 試作条件の角パターン

4) 縫製について

ギャザーの縫い線は、直線にする。チュール1枚をぐし縫いし、ギャザーを寄せる。糸は目立たないように透明糸を2本取りで使用する。

5) その他

コームは8cm幅を使用する。

IV 比較検証と考察

項目ごとに試作したヴェールの比較を行い、検証することで各特徴の分析を行う。

検証1：素材の比較

比較対象とする素材は、一般的にヴェールとして使用されている素材の中でも入手しやすく、目視だけでは違いが分かりにくいものを選択し、各素材で制作する。比較する素材は比較条件の15D チュール、20D ソフトチュール、スーパーソフトチュール、クラシカルチュールの4種とする。

1) 15D チュール（以下15D）（ナイロン100%）

試作条件の15Dは薄い生地であり、張りがあるのが特徴である。（図10～12）

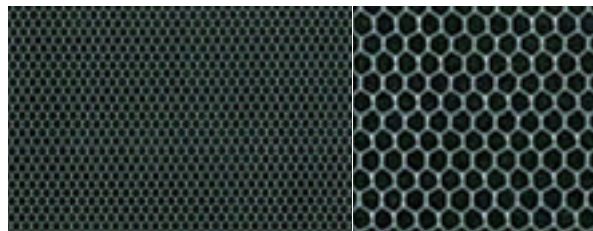


図10 15D チュール

部分拡大



図11 15D チュール正面



図12 15D チュール側面

2) 20D ソフトチュール（以下20DS）（ナイロン100%）

試作条件の15Dよりも糸が太く厚みが増し、透け感が減って見た目が白っぽくなる。張りはなく、ソフトな風合いで柔らかい手触りである。（図13～15）

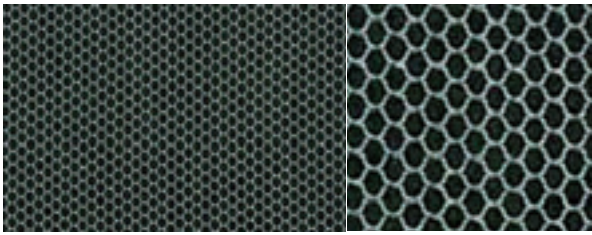


図13 20D ソフトチュール 部分拡大



図14 20D ソフトチュール 正面



図15 20D ソフトチュール 側面

3) スーパーソフトチュール (以下SS) (ナイロン100%)

糸の太さは試作条件の15D 程度だが、20DS よりも柔らかい。張りがなく、しなやかである。(図16~18)

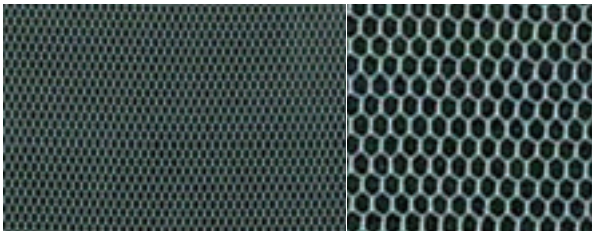


図16 スーパーソフトチュール 部分拡大



図17 スーパーソフトチュール正面



図18 スーパーソフトチュール側面

4) クラシカルチュール (以下Cla) (ナイロン100%)

ダイヤ型の網目が特徴で、見目が白い。張りがあり、サラッとした手触りである。(図19~21)

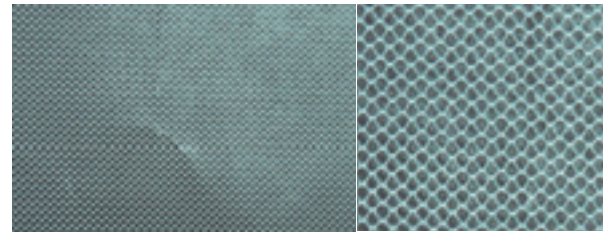


図19 クラシカルチュール 部分拡大



図20 クラシカルチュール 正面



図21 クラシカルチュール 側面

考察

4種の素材でパターンや縫製方法を同一にして制作したヴェールを比較した際に顕著にあらわれたのは、チュールの張りによって変わる裾の広がり方の違いと、網目の密度や糸の太さの違いによる見た目の白さの違いである。張りによる裾の広がり方は、Claが最もあり、次いで15D、20DS、SSの順となる。見た目の白さはClaが最も白く、次いで20DS、SS、15Dの順となる。15Dは張りが強く、付け位置から裾までのシルエットが直線的に広がり、側面から見た際の前後の広がり方も大きい。しかし、大きく広がる分、チュールが重なる面積が小さくなるため、見た目の白さが最も弱い。20DSは張りが弱いため、頭から肩にかけてのラインは体に添うようにカーブを描く。裾の広がりもやや控えめなので、チュールが重なる面積が大きくなり、見た目の白さが強くなる。SSは一番張りが弱いため、全体的に裾の広がりが少なく、ヴェールが体に添うカーブが強い。広がり小さいが、その分ドレープが綺麗に流れる。重なる面積は増えるが、20DSよりも見た目の白さが弱い。Claは15Dよりも張りがあるので、一番裾の広がりがある。網目が細かく、生地の見目が白いため、重なりは少ないが最も白く見える。

検証2：ギャザーによるボリュームの変化の比較

ギャザーの寄せ方によって変化するボリュームの違いを比較する。

- 1) 直線を寄せるギャザー (試作条件と同一)
直線に縫い、ギャザーを寄せる。(図22、23)

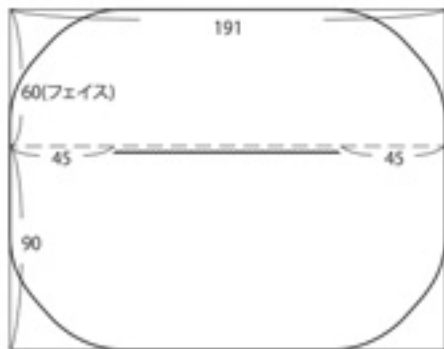


図22 直線を寄せるギャザーのパターン



図23 直線を寄せるギャザー

- 2) 波型を寄せるギャザー 1
間隔5 cm、高さ1.25cmの波型に縫い、ギャザーを寄せる。(図24、25)

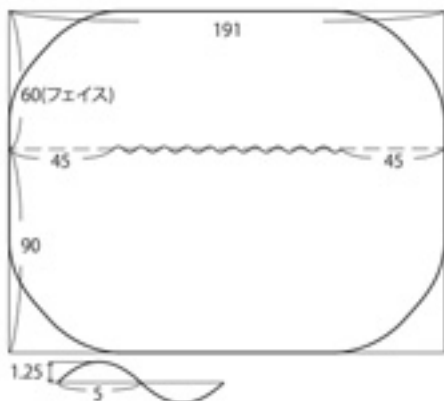


図24 波型を寄せるギャザー 1のパターン



図25 波型を寄せるギャザー 1

- 3) 波型を寄せるギャザー 2
間隔5 cm、高さ2.5cmの波型に縫い、ギャザーを寄せる。(図26、27)

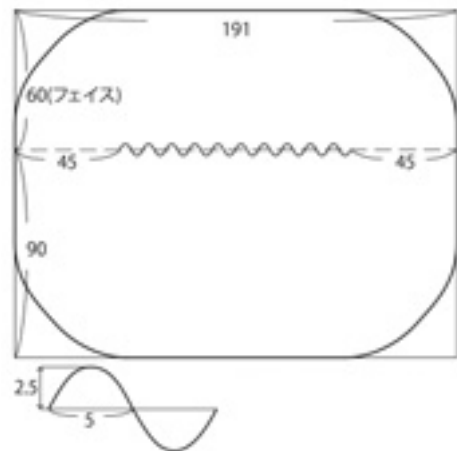


図26 波型を寄せるギャザー 2のパターン



図27 波型を寄せるギャザー 2

- 4) 舟形を寄せるギャザー
フェイス・ヴェールとバック・ヴェールの境目で折り、深さ5 cmの舟形に切り取る。切った周りを一緒に縫い、ギャザーを寄せる。(図28、29)

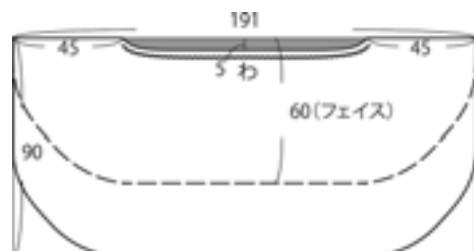


図28 舟形を寄せるギャザーのパターン



図29 舟形を寄せるギャザー

考察

ギャザー分量が同一でも直線を寄せたギャザーは、トップの中央部分にボリュームが出る。波型を寄せたギャザー1・2は、縫い目に出来る凹凸の山が大きく、トップ全体に丸みのあるボリュームが出る。波の高さ1.25cmの1より2.5cmの2の方が、縫い目の山が大きくなり、トップのボリュームも増える。舟形を寄せたギャザーは、トップのボリュームは控えめだが、舟形の両サイドにある曲線が直線的に寄せられることで、カーブにカットした部分の膨らみが多くなる。ギャザーの寄せ方により、ボリュームの出方に違いが出る。

参考

チュールを重ねる枚数やギャザーを寄せる位置を変えることで、以下のような形状を得ることができる。

ギャザーを寄せる位置でわに折り、一緒に縫い、ギャザーを寄せる。縫い目の納まりがよく、ボリュームも抑えられる。(図30)



図30 2枚一緒に寄せるギャザー

フェイス・ヴェール2枚、バック・ヴェール1枚から構成されるヴェールを、トリプル・ヴェールという。3枚一緒に縫い、ギャザーを寄せるため、トップとサイドのボリュームが格段に多い。(図31)



図31 トリプル・ヴェール

チュールの端から端までギャザーを寄せるヴェールは、端を残す場合に比べ、ギャザー量が増えることも

あり、全体にボリュームが出る。サイドに垂れる部分がないため、側面から見るとフェイス・ヴェールとバック・ヴェールの間に隙間が出来る。(図32)



図32 端から端まで寄せるギャザー

検証3：丈の長さの比較

ヴェールの長さは、ショート丈、ミディアム丈、ロング丈に大きく分かれる。試作条件のマネキンのサイズに合わせて寸法を決め、丈の違いにより生じるドレスとのイメージの変化を比較する。(図33)

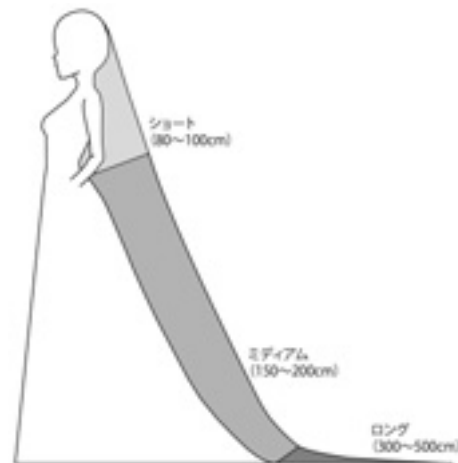


図33 丈の長さ

1) ショート丈

ショート丈は、ヒップよりも短いとされる。試作条件のパターンで示したヴェールと同一の90cmとする。(図34、35)

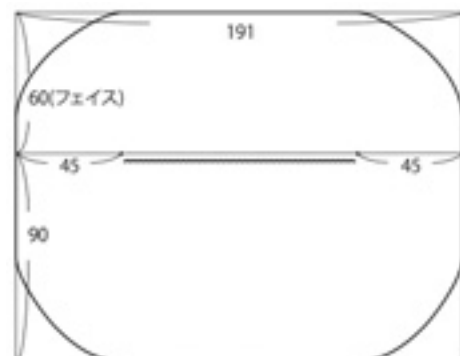


図34 ショート丈のパターン



図35 ショート丈

2) ミディアム丈

ミディアム丈は、ヒップから床に付く程度とされる。ドレスを着用させたマネキンを、ドレスのボリュームに沿わせながら採寸し、トップから床までの200cmとする。(図36、37)

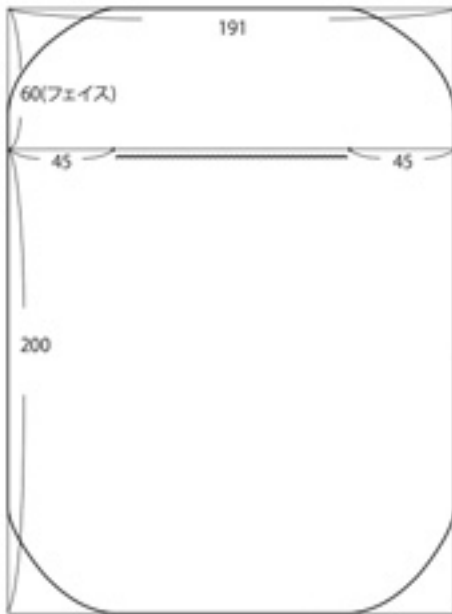


図36 ミディアム丈のパターン



図37 ミディアム丈

3) ロング丈

ロング丈は、ドレスのトレーンよりも長いとされる。ミディアム丈と同様に採寸を行い、ドレスの裾から100cm 長くした350cm とする。(図38、39)



図38 ロング丈のパターン



図39 ロング丈

考察

素材や縫製方法が同一であっても、ショート丈は、トップの部分にかかる重さが少ないため、トップのボリュームを出しやすく、軽やかで若々しい印象であ

る。ミディアム丈は、裾に広がりを出すことができ、チュールを床に引きずらないため、歩く際の型崩れが起きにくい。洗練された、落ち着いた印象である。ロング丈は、ショート丈やミディアム丈と異なり、正礼装時に着用するヴェールの長さである。ロイヤル・ウェディングを思わせる重厚感があり、気品のある印象である。

参考

チュールには幅広のものがあり、ロング丈のヴェールに使用することで、裾にボリュームのあるドレスとのバランスが取り易い。(図40)



図40 幅広のチュールによるロング丈

検証4：パターンの形状による裾線の比較

ヴェールのパターンの形状は楕円が主流である。丈と幅で裁断した四つ角の形状をどのようなラインにするかで、裾線に現れる変化を比較する。

1) 四角形のパターンによる裾線

フェイス・ヴェールとバック・ヴェールを合わせた全長150cmの丈と、幅191cmで裁断し、角をそのまま残した四角形のパターン。(図41、図42)

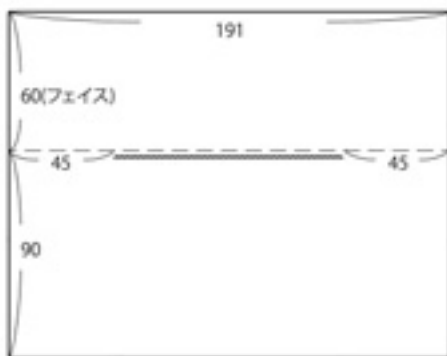


図41 四角形のパターン



図42 四角形

2) 楕円 (A、B、C) のパターンによる裾線

楕円Aは、カーブが始まる位置を図43、44のように、角から縦55cm、横60cm、二等分線上で27cmを通るパターンとする。楕円Bは試作条件である楕円のパターンとする。楕円Cは、カーブが始まる位置を角から縦35cm、横30cm、二等分線上で17cmを通るパターンとする。楕円は以上3つを検証する。(図43～47)

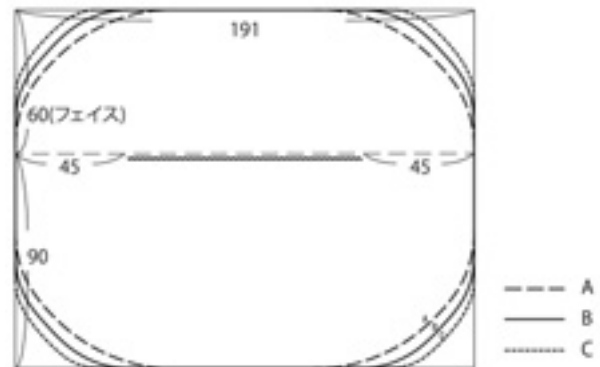


図43 楕円ABCのパターン

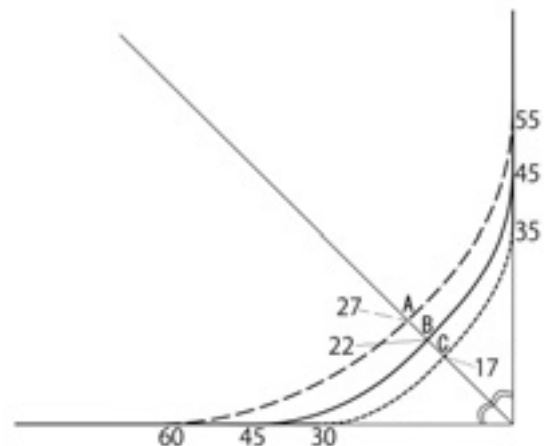


図44 楕円ABCの角パターン



図45 楕円 A



図46 楕円 B



図47 楕円 C

る。素材や縫製方法を同一にしても、側面から見た際に、裾線の違いが顕著にあらわれた。

四角形のパターンによる裾線は、ハンカチーフ・ヘムラインとなるので、縦方向の流れが強調される。サイドに流れる角の先が、バック・ヴェールより長く垂れ下がるのも特徴である。楕円のパターンによる裾線は、ラインの違いで繋がりが異なる。最も繋がりが滑らかなのは、カット量の多い楕円 A であり、次いで楕円 B、楕円 C の順となる。角が削れるほど、裾線の繋がりは滑らかになる。

参考

円のパターンによる裾線は、フェイス・ヴェールとバック・ヴェールの裾の繋がりが一番滑らかなので、ヴェールダウン、アップのどちらの状態でも裾線が美しく見える。(図48、49)



図48 円のパターン



図49 円

考察

多くのヴェールは角を丸くカットし、フェイス・ヴェールとバック・ヴェールの繋がりを意識してい

V まとめ

今回、多数のサンプルを試作し、比較・検証することで、下記のようなことが分かった。

1) 素材の比較

パターンや縫製方法を同一にしても、素材によってシルエットや見た目の白さが大きく変化する。そのため、ドレスのデザインやシルエットも考慮し、制作するヴェールのデザインにあわせ、それぞれの特性を活かせる素材を選択する必要がある。

2) ギャザーによるボリュームの変化の比較

ギャザー分量が同一でも、寄せ方を変えることでボリュームの出方が変化する。ギャザーによるボリュームは、ドレスのシルエットとのバランスも考え、どこにポイントを置くか検討が必要である。

3) 丈の長さの比較

素材や縫製方法が同一であっても、丈の長さが短いと軽やかな印象になり、長くなるにつれて落ち着き、気品のある印象になることが分かった。花嫁が周りに与えたい印象やドレスを着用する場所に合わせ、丈の長さを選択する必要がある。

4) パターンの形状による裾線の比較

素材や縫製方法を同一にしても、パターンの形状によってヴェールの裾線は大きく変化する。四つ角が角に近いほど縦方向の流れが強調され、円に近いほど裾線の繋がりが滑らかになる。ドレスの装飾やシルエットを考慮し、裾線の繋がりを検討する必要がある。

以上の検証結果は、制作の際に重要視すべき点であると考えられる。本研究であげたサンプルをもとに、4つの項目を組み合わせることで理想のヴェールを制作することが可能となる。

VI おわりに

ウェディング・ヴェールは、格式や式場の大きさによって丈の長さや変化するなど、本来はルールづけされているが、今日の日本ではほとんどルールはなく、花嫁の好みと与えたい印象、ウェディング・ドレスとの調和が重要視されている。

本学の特色は服飾造形であるが、集大成として卒業制作でウェディング・ドレスを制作する学生も少なくない。そのウェディング・ドレスにとってヴェールは重要なアイテムではあるが、必要性だけが重視され、制作にあたりその素材やパターンにまで重点を置かれていないのが現状である。本研究で取り上げた「素材」、「ボリューム感」、「丈の長さ」、「裾線のライン」

の組み合わせにより、制作のイメージが掴みやすくなると考える。

また、今回はウェディング・ヴェールのみにも焦点をあてて比較・検証を行ってきたが、今後はドレスとの関連性などを重点的に本学の特色である服飾造形の観点からも調査・研究をしていきたい。

謝辞

写真の掲載に関し、快く許可をして頂いた[©]gap JAPAN様に心より御礼申し上げます。

註

- 1) 『魅力的なブライダルコーディネーターを目指す BRUSH-UP BOOK』(BIA) 社団法人日本ブライダル事業復興協会 2007. p. 43.
- 2) 田中千代著『新・田中千代服飾辞典』同文書院 2002. p. 79.
- 3) 増田美子編『花嫁はなぜ顔を隠すのか』悠書館 2010. p. 322.
- 4) 杉野芳子編著『改訂第4版図解服飾用語辞典』精興社 1998. p. 295.

図版出典

- 図1 「2012 gap COLLECTIONS Bridal vol. 8 デジタル版」[©]gap JAPAN p. 3.
- 図2 「gap COLLECTIONS BRIDAL vol. 10」[©]gap JAPAN p. 40.
- 図3 「2012 gap COLLECTIONS Bridal vol. 7」[©]gap JAPAN p. 318.

参考文献

- ・坂井妙子著『ウェディングドレスはなぜ白いのか』株式会社勁草書房 1997.
- ・カーリー・ロニー著『ウェディングドレス・ブック』沖野十亜子訳 株式会社フレックス・ファーム 2006.
- ・『手作りウェディングドレスとお色直しドレスNo.3 (レディブティックシリーズ no. 945)』株式会社ブティック社 1995.
- ・関根節子・鈴木恵美著『手作りのウェディングドレス&グッズ』文化出版局 1997.
- ・むらかみゆうこ著『パリジェンヌの手作りノート 花嫁のドレス』文化出版局 1998.

- ・『手作りウエディングドレスとお色直しドレス (レディブティックシリーズ no. 1320)』株式会社ブティック社 1998.
- ・松藤ゆきよ著『はじめての手作りウエディング小物 (レディブティックシリーズ no. 1592)』株式会社ブティック社 2000.
- ・今井朗子編『MISS BOOKS ハンドメイド・ウエディング』株式会社世界文化社 2001.
- ・中屋典子・田坂真紀子・中原五十鈴他著『服装造形学 技術編3 [フォーマル編] 文化女子大学講座』文化女子大学教科書出版部 2001.
- ・渋谷英子著『渋谷英子の手作りウエディング小物』株式会社主婦と生活社 2003.
- ・月居良子著『手作りドレスでウエディング』文化出版局 2004.
- ・川名晶子他著『ソーイングでつくる私だけのオリジナルスタイル 素敵な手づくりウエディング小物』株式会社ナツメ社 2009.
- ・『ブライダルの基礎知識 プロへの第一歩』一般社団法人全日本ブライダル協会 2009.
- ・浦山千砂著『Bridal Total Produce ブライダル・スタイリング Bridal Styling Block』ヒューマンアカデミー株式会社 2010.
- ・『フォーマルウエアスタイルガイド』©日本フォーマル協会 2011.
- ・「25ans ウエディング&ビューティ vol. 8」株式会社ハースト婦人画報社 2010.
- ・「別冊家庭画報 Miss Wedding 2012春夏号」株式会社世界文化社 2012.
- ・「ELLE marriage collection エル・マリアージュ No. 16」株式会社ハースト婦人画報社 2013.
- ・「ELLE marriage collection エル・マリアージュ No. 16 別冊付録」株式会社ハースト婦人画報社 2013.
- ・「別冊家庭画報 Miss Wedding 2014春夏号」株式会社世界文化社 2014.
- ・「25ans ウエディング&ビューティ vol. 12」株式会社ハースト婦人画報社 2014.
- ・一見輝彦他著『新ファッションビジネス基礎用語辞典 (増補改訂版)』(株)バンタンコミュニケーションズ© 2004.